

“Great Yoshino” を偲ぶ

上野健一（筑波大学・生命環境系）

当時、同級生の中で先生をこのように呼んでいたと記憶しています。何かをやろうとすると、必ず先生の先行研究が見つかるからでした。今思えば、それだけ学生は自主的にテーマを模索し、教官もそれに対して寛容でした。私は“退官記念 Dr.”だったので、博士論文の提出期限に向けて、一か月に一度はアポイントメントをとって研究室に伺い、書けたところからとことん文章を直されました。仕事が進んでいなくても、図が出来ていなくても、文章を残しました。書くことで、次のステップを探しました。**とにかく書き残す。**地理学者としての教え、そして研究者としての原則がそこにありました。

今思うと、学部から院への進学では、多くの先生にご面倒をかけました。当時は自分本位で身勝手な院生生活にあまり気が付いていなかったのですが、先生は文句も言わず、よくもまあ面倒を見てくれたと思います。その結果、学外も含めて数多くの恩師に巡り会い、多くの事を学びました。自由な発想を重んじていただけた先生のおかげです。一つだけ、何かの折に、“自分はそれほど頭がよくないので、”とかなんとか言い訳を言い、“**他人に自分がバカだと言って何の得になるんだ**”と叱られた記憶があります。弱音を言ってみたとこで誰も助けてはくれない。そういう事です。

先生とフィールドに出ると、必ず発見があり、勉強になりました。野外で現象を計測するのが大好きな私に、“**無駄な観測データは一つもない**”と名言をおっしゃいました。たとえ目的となる現象を測定できなくても、その場で得られたデータからテーマを見つけ、まとめる癖をつけろという指導。今風に言うところ“セレンディピティ”を身に着けるという事。何事にも広く浅く首を突っ込む私に、“**興味が広いほど土台がしっかりした大きなお城が建つものだ**”とも励ましてくれました。雲南に一月滞在する機会をいただき、大陸での衝撃的な観測の第一歩が始まりました。その後、何かの機会に先生の前でヒマラヤ・チベットでの研究成果を披露したことがありました。先生から、“雨とか風とかではなく、君は全部をまるごとやろうとしている”とコメント頂きました。現象の連動を意識した研究路線は、その時に生まれたように思います。

ここに一枚の写真があります。何をしているか、お分かりでしょうか。恥ずかしながら、先生の教え子の一人として、強い糸につながれながらゆらゆらと、大地を広く見渡し、これからも先生の教えを語り継ぎたいと思います。

